

にすぎない。そして不思議なことにはこの恐慌の現象的敘述が本書の最も生彩に富んだ部分となっているのである。著者は産業循環の3つの局面、好況、恐慌、不況について約80頁をささげている。この部分はこれだけ獨立したものとして充分啓發されるものをもっている。だが著者がこれによって恐慌の「現實的」必然性を證明し得たかどうかはまた別問題である。

宇野氏のいう必然性についてはいろいろな問題があろう。ここではその一つ一つについて論ずる暇はないが、そのうち重要な2点について論ずれば、第一に、このような必然性によっては過小消費説に陥る危険性はないが、過小労働力説という反對の謬論に陥る危険性があるのではあるまいか。私はこれをただ疑問として提出しておくだけに止める。というのは第2の點がもっと重要だからである。宇野氏は低落する利潤率と高い利子率とのあいだに恐慌爆發の原因を求めているが、これは恐慌の結果であって、その原因ではないのではあるまいか。好況時において昂騰する物價、高い利潤、高い利子率の下にすでに恐慌の諸要因が成熟しているのである。宇野氏は好況期においては低下する利潤率は隠蔽されており、空幻的な高い利潤率が現わるといふが、實に空幻的なものは利潤率だけではなく、高い價格もそうであり、高い利子率もそうである。この一切の空幻的なものの面皮が引きさかれるのが恐慌なのである。ここで再びわれわれは「直接的搾取の條件とその實現の條件とは同一ではない」(青木文庫「資本論」(9) 355頁)という實現論の基本的命題に歸らなければならない。つまり好況期における直接的搾取は空幻的なものであり、それは實現の諸條件によって暴露されるのである。そしてわれわれは再び、なぜ宇野氏がこの基本的命題を輕視したかその理由を想起するのである。

思うに、宇野氏がこのような理論的混亂に陥ったのは、「資本論」の段階において氏のいうような「現實的」必然性を求めたためである。氏自身は恐慌を「原理論」的に解明すべきことをしばしば繰返しておられるにもかかわらず、そうである。そこで私は、價値ないし生産價格からの市場價格の離反の問題をその範圍外とする「資本論」的原理論のなかで、勞賃の一時的昂騰による利潤率の低下によって恐慌の必然性を解明することは無理であるという久留間鮫造氏の所論(同氏著「恐慌論研究」288頁)に賛成すると共に、それはやはりマルクスが「經濟學批判」の「序説」の中でブルジョア經濟の體系の考察順序として最後にあげられた「世界市場と恐慌」ではじめて解明されるのではないかと思われる。

(平館利雄)

R. ヌルクセ

### 『未開發國における資本形成の諸問題』

Ragnar Nurkse: Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries. Basil Blackwell, Oxford 1953. 163. p.

本書は、1952年にエジプト銀行 National Bank of Egypt の50周年記念講座の1つとして出版された「未開發國における資本形成の若干の問題點」Some Aspects of Capital Formation in Underdeveloped Countries を中心としており、更にそれに、序文及び3章が附加されて出來上っている。

#### I

先ず、本書の序文でヌルクセは、資本は經濟發展の必要條件ではあるが、充分條件ではなく、經濟發展には、資本の外にその國民性、社會狀態、政治事情、更に歴史的背景等が、大いに關係するものであるとしている。又最後に、資本形成は國內でのみなされ、資本を重視する社會でのみなし得るとし、そのために必要なのは技術や、科學、又それ等を實際に適用すること等を含めての idea であり、それは物質的な富より重要であると述べている。實に此處にヌルクセは、未開發國の經濟發展は、經濟問題以上のものであることを強調している。

今その問題を離れてヌルクセに従って本書の特徴を見ると、

第1に、本書は資本形成に關する體系的なものではなく、arbitrary なものであり、又一般的なものである。即ち、本書では、未開發國のもつ共通の性格の部分だけを取扱い、特定國の特定事情については、餘り觸れないとしている。

第2に、本書は、資本形成の問題を主として國際的見地から眺めている。即ちそれは、實に先進國の生活方式が未開發國に及ぼす影響(第3章)、外國資本の未開發國の資本形成に及ぼす影響(第4章)輸入制限の未開發國の資本形成に及ぼす影響(第5章)の分析の中に窺われる。このように國際的見地から眺める第1の理由は、國內的見地から眺めると當然各國の特定事情に觸れなければならないが、それには、ヌルクセは時間も能力も持合せがないとしている。又國際的見地から眺める第2の理由は、それ等は特に英米に非常に密接な關係があるためであるとしている。

第3に、資本形成に關係のある生産能力の中には、物質的なものと然らざるもの、例えば技術、教育、健康等の如き文化的、社會學的、人口學的なものがあるが、それ等についての知識を持っていないため、本書では、物的資本の蓄積について説明するとしている。

第4に、資本蓄積に關する技術的な問題、更に實際の資本蓄積に大きな重要性をもつ、財政、及び金融の問題は、國々によって夫々異なるものである故、本書では餘り觸れないとしている。

以上の如く、ヌルクセは未開發國一般の問題を可成り廣範圍に亘って取上げている。然し、此處では主として、ヌルクセの「隠れたる失業」Disguised Unemploymentと「デモンストレーション」効果Demonstration Effectとの2つの概念について考察することとする。

## II

ヌルクセは、過剰人口をもつ未開發國の資本調達の源泉として、次の3つの途を考えている。即ち、第1に、ノーマルな、自發的貯蓄を通ずる途、及び課税による途があり、それでも不足があると、第2に外國資本による途があり、最後に第3の可能な途があるとしている。それは實に「隠れたる失業」を使用する途である。ヌルクセは「隠れたる失業」とは、技術を一定としても、生産量を減少せしめることなしに排除することの出来る人口であるとしており、それは殊に東南ヨーロッパ、東南アジアの農業人口の中に見られるとしている。勿論これに對して、かかる「隠れたる失業」は季節的な現象であるとする者もあるが、ヌルクセは、例えそうであっても、その労働の生産的使用ということを考えなければならぬし、又年中かかる失業を有している國さえあるとしている。

斯くの如く、過剰人口をもつ未開發國では、不生産的な餘剰労働者が、生産的労働者によって扶養されて來ているため、今その不生産的な餘剰労働者が排除されると、それだけ生産的労働者は實際に貯蓄をなすことが出来ることとなる。又その貯蓄によって從來の不生産的な餘剰労働者を生産的事業に用いれば、從來の不生産的消費も生産的消費に變ると述べている。このようにして「隠れたる失業」によって資本形成をはかることは、消費水準を切下げることなしに可能となる。其處でそれは古典學派の資本蓄積が消費の切下げによって齎られるという點で、又ケインズ經濟學では、消費と投資とは同時に行われるという點で、それ等とは異なるものであるとしている。

只この「隠れたる失業」を使用する場合、必ずしも生

産的労働者によって貯蓄がなされるとの保證はない。殊に前より裕福となった生産的労働者は、前以上の生活を望むであろう。其處で、それを防ぐために、課税の手段が有効であるかも知れないと述べている。又この「隠れたる失業」は、その生産力が非弾力的である農業に多く見られ、工業における失業と異り、貨幣的需要の増大によっては吸収せられないという特徴をもっている。

## III

ヌルクセは、絶對的實質所得水準の外に、他の國と比較した相對的實質所得水準の概念を導入して先進國の生活方式が如何に未開發國の生活方式に、又經濟發展に影響するかを分析している。實に此處でヌルクセは、デューセンベリー Duesenberry の「デモンストレーション」効果を國際的分野に應用している。即ち、「デモンストレーション」効果とは、未開發國が、先進國の生活方式の魅惑に負けて、自國の能力以上の生活方式をなさんとすることをいう。其處でこの効果が働く限り、未開發國では何時までも資本の蓄積は不可能であり、又未開發國の經濟發展を望むことが出来ないこととなる。殊に世界の所得分布が極めて不平等となり、科學の進歩により益々世界が狭くなるにつれて、この効果がより強く働くこととなる。其處で未開發國において貯蓄率が小さいのは絶對的實質所得水準が低いことによるばかりでなく、この効果によって消費性向が高められる結果であるとしている。又戦後のドル不足もこの効果からヌルクセは説明している。

斯くして國際的な所得の乖離は、「デモンストレーション」効果を通じて、國際收支に歪みを与えるばかりでなく、未開發國の國內貯蓄や資本形成に障礙を与えることとなる。其處でこの効果を除去することが必要となる。そのために當然考えられるのは經濟の孤立化である。その例としてヌルクセは、日本の明治初期では生活方式だけは先進國から孤立せしめ、技術その他の點では先進國のものを模倣したこと、又ソ連の「鐵のカーテン」はソ連に高い貯蓄率や投資率を維持するためのものであるとしている。

然しこの孤立化ということは、政治的にも經濟的にも不穩當なことであり、敗北主義的な解決策であるため當然別の手段を考えるべきであるとし、「富める國」から「貧しき國」への所得移轉を考えている。この國際的な所得移轉は未開發國からばかりでなく、先進國からも必要とされるものであり、アメリカも最近國際的な生活水準の乖離に氣付いてポイント・ファー計畫に乗り出したと述べている。



然しヌルクセは、この「富める國」から「貧しき國」への所得移轉は、必ずしも未開發國の資本形成の問題に自動的解決を與えるものではないとしている。即ちそれは却って「デモンストレーション」効果を働かせ、未開發國の消費性向を高める可能性をもっており、その結果それがドル不足の緩和に役立つとしてもそれは未開發國の資本の不足を救うものではないとしている。そうしてこの考え方を交易条件の向上の場合及び輸入制限の場合にまで擴張している。

#### IV

勿論以上の「隠れたる失業」にしろ「デモンストレーション」効果にしろ又幾多の問題が存在する。先ず「隠れたる失業」ではそれを如何に捕捉するかが問題である。全く不生産的な労働者というものは現實にとらえることは出来ない。勿論我國に見る如く、不況期に農村に流入する人口はこれに相當するものであろう。又假に不生産的な労働者がとらえられても、果してこれを生産的な計畫に直ちに使用し得るとは限らない。其處に1つの力が必要であるかも知れない。こういう意味からして、戦後中共における治水工事は正に「隠れたる失業」によるものであるかも知れない。

次に「デモンストレーション効果」が主に未開發國の資本形成及び經濟發展を阻止して來たということには問題がある。確かにこの効果によりその經濟發展が阻止されて來た國はあるであろうが、一般に未開發國では特殊な階級を除いては、「デモンストレーション」効果さえ働き得なかったということが出来よう。それは又、ヌルクセが「デモンストレーション」効果を日本の明治初期における經濟發展の積極的理由とすることは行き過ぎではなからうか。

最後にヌルクセは、如何にして未開發國は資本形成を圖るべきかということについて餘り觸れていない。勿論國內開發には、先ず國內貯蓄をもってなさなければならず、その國內貯蓄をはかるのには、「隠れたる失業」及び技術や科學、又それ等を實際に適用する idea が必要であるとしている。然しそれにしても猶その解答は不明確なものである。それは、ヌルクセの説明が一般的なものであるためであるかも知れない。それにも拘らず、現在未開發國にとって重要且つ焦眉の問題を、種々の理論的武器を駆使して究明されたことは正に大なる貢獻と云わざるを得ない。

(三宅武雄)

#### A. バークソン編

#### 『ソヴェト經濟の成長』

Abram Bergson: Soviet Economic Growth. Conditions and perspectives. New York, Row, Peterson and Company, 1953. viii, 376 p.

ソヴェト經濟の研究において、現在、世界のどの國が最も進んでいるかは、もちろん、人によって見解が異なるであろうが、少くとも、アメリカがソヴェト經濟力の實態把握に最も多くの人材と資金を投じている國のひとつであることは疑いない。本書は、バークソンが序文で述べているように、「ソヴェト經濟の成長という題目について、西歐の學者によっておこなわれた最初の大きな研究のひとつ」であり、現在のアメリカのソヴェト經濟研究の水準と成果と特徴を示すものといえる。本書は1952年5月に Joint Committee on Slavic Studies of the American Council of Learned Societies と Social Science Research Council の後援によって開催された報告討論會の記録に若干の改訂を加えたものであり、全部で31人のソヴェト經濟専門家と經濟成長論の専門家が参加している。構成は、グレゴリー・グロスマン以下12人のソヴェト經濟専門家が、國民所得、資本形成、人口と労働力、運輸、工業資源、工業労働生産性、工業生産、農業資源、農業組織、農業生産、ソヴェト圏内の貿易、東西貿易という12のテーマについてのべ、各論文に2, 3人の論者のコメントが附加されているが、コメントの執筆者の中には、ワシーリー・レオンチエフ、A. ゲルシエンクロン、A. バークソン、E. ドマール、などの著名な人々もふくまれている。

本書の特徴を簡単に要約すれば、ほとんどその比をみないほど豊富に集積されよく整理された、ソヴェト政府發表の統計資料を用いて、これに近代經濟學的方法による分析を加え、ソヴェト經濟の成長条件と殊にその將來のみとおし(ほぼ1970年ぐらいをめやすにして)を明かにしようとしたものといえる。そしてこの場合、當然豫想されるように、アメリカとの比較に大きな重點がおかれているが、この比較にあたって本書の執筆者たちがつねに十分、公平で冷靜な態度を守っているとは必ずしもいい難い。

本書はもちろんプリミティブな反ソ宣傳書とは性質を異にしているが、それにしても、本書の執筆者たちが、經濟的成長条件の解明というような問題において、制度